# 「ヨブ記」の散文について

## ——生成理論による文体分析の試みとして——

石　黒　昭　博

従来おこなわれてきた文体研究は，理論的基礎が薄弱で，あるものはあまりに印象主義的，あるものはいたずらに統計資料的にすぎ，文体の分析によってそれぞれの作家の構文上の特徴，ひいては，その思考法，発想法の特徴を探るという方法はとられなかった．

Richard Ohmann は言語理論に基づいた文体論の確立のために模索をくりかえしたが[1]，変形文法理論をもって，自己の方法の根拠となるものを発見した[2]．彼は，文体の研究は言語の理論と，意味論の原則に依存したものでなければならない，と主張する．彼は，さらに，この言語の理論と意味論の原則のふたつが，言語の体系を記述する大きな役割を果たすという信念から，文学作品も言語を材料としたものであるからには，このふたつの枠の中でこそ論じられるべきである，という結論に達した[3]．

変形文法の理論は上の目的に合った理論を文体の研究にも提供することは確かである．変形文法の対象とする文は，思いつきや，断片的なものが多いという批判はしばしばおこなわれるが，美的言語と呼ばれる文学作品の言語も，日常会話に用いられる言語も，同じ言語材料を使って生成されるものであり，言語の分析に文学作品を用いることも，文学作品を一般言語理論の材料として用いることも，どのような文法理論の中でも避けて通るべきことではない．

語を変えることは，意味を変えてしまうことだが，文を変えることは，必ずしも意味を変えることではない．同じ伝達内容をいかに表現するかが

作家の選択するところであり，作家は，意識するとしないにかかわらず，自らの変形規則を駆使して，自らの文体を作りあげているのである．言いかえれば，その作家の変形の類型（pattern）を見つけることが，その作家の文体上の特徴を見つけることになる．変形に注目することによって，次のことが想定できる[4]．

1. 随意変形規則の適用によって，同一の意味を表現する言い換えが可能なこと．
2. 変形規則は文型は変えても，基文の特徴は残存させること．
3. 変形規則は基文から複文が生成される際の語の配列方法を規制していること．

文体とは，以上のような原理から，読者がどのように構文上の特徴を認識するかによって定められると言える．

特徴的な文体をもった作家は，基文をどのように結びつけるかによって，その作家に特異な複文構成法をもつのである．言いかえれば，それぞれの作家は，それぞれお好みの変形規則群をもち，その操作によって，彼に特異な文体を作り出してゆくのである．

Ohmann は Faulkner や Hemingway の文章を彼の理論に基づいて分析して，Faulkner は付加的変形，つまり，関係節変形，接続詞変形，比較構文変形をしばしば使うことに特徴をもち，Hemingway は，引用変形，間接話法変形，省略変形に特徴をもつと述べている[5]．

文学作品によく使われる変形は，1. 付加，2. 省略，3. 再配列，4. 連結であるが[6]，これらに加えて，はめ込み文の成立過程やその種類にも注意しなければならない．

英訳聖書の文体研究も今まで数多く行なわれてきたが，いずれも Ohmann の指摘する 12 の範疇[7]に属するものが多く，その大部分は言語理論に基をおかない印象主義的，または，統計資料的なものが占めている[8]．

本稿は，Ohmann の方法に基づいて，*The King James Version*（以下 KJV と略す）と *The New English Bible*（以下 NEB と略す）の「ヨブ記」の散文を比較研究し，KJV の文体の特徴と NEB のそれを見い出し，16 世紀の標準的口語の文体[9]と，現代の標準的口語の文体との間には，いかなる違いがあるかを探ろうとする試みである．両訳ともに，個人の手のみによってなったものではなく，従って，個人作家の文体とは言い難いが，集団の訳者の手によるものであれば，それだけ同時代の代表的散文の一端をのぞかせているものであることに間違いはない．

KJV は当時の代表的口語の大集約であり，NEB に対する訳者達の自負も広く認められているところである[10]．

方法は，KJV「ヨブ記」の散文部分の各節を逐一調べ，その中でどのような変形規則を応用した文によって，それぞれの情報（information）が与えられているかを探り，それから，それに対応する NEB の箇所を照応して，同じ情報が，どのように変った変形規則を応用した文によって与えられているかを調べる．さらに，いわゆる古い文体（KJV）の特徴と，新しい文体（NEB）を比較して，その古さと新しさを変形規則の好みの問題として考えられるかどうかも検討したい．これは，「同じひとつの表現法（discourse）から派生される構文の生成への過程において相違があれば，変形規則の応用の違いがここにおいて見られる[11]」ということの検索でもある．

資料は「ヨブ記」の散文部分に限られる．これは，韻文の文法は，韻律上の効果のために独特のものとなり易く，散文の資料とは区別する必要があると考えたからにほかならない．勿論，韻文の文法を調べることは，別の問題として，充分の研究の対象となることは当然であり，筆者も将来これに研究の焦点を当てたいという野望をもっている．

「ヨブ記」の散文は 1）KJV の第1章と第2章，NEB の Prologue,

2) KJV の第 32 章の第1節から第5節まで，NEB の Speeches of Elihm の冒頭の数文，3) KJV の第 42 章の第7節以下と，NEB の Epilogue である．以上のうち，2) の部分は対象から除外した．

分析は，8項目をまず設定し，それぞれの項目別に上記の方法を用いて行われる．項目の決定は，あくまで文体論という立場から行われたものであり，文法的，形態論的類型で分けたものでないことをお断りしておく．

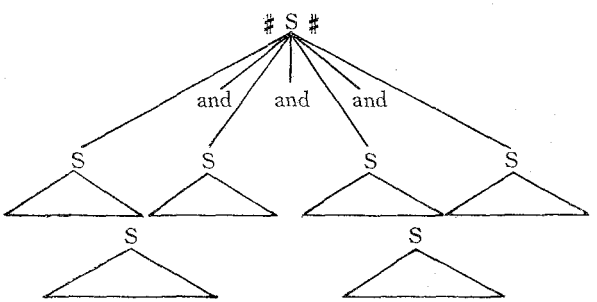
## 1. 文 の 結 合

「ヨブ記」の散文にみられる文の結合の仕方は，主に，関係節変形[12]と接続詞変形[13]によるものが多い．しかし，KJV と NEB の同一部分の訳文を比べてみると，KJV では，NEB におけるよりも多くの変形操作を経た一層複雑な文の結合がみられる．

例えば，KJV, I, 1:

$_{S}[_{s}$[There was a man in the land of Uz] $_{s}$[whose name was Job] and $_{s}$[that man was perfect and upright] and $_{s}$[(he was) one] $_{s}$[that feared God] and $_{s}$[(he) eschewed evil]]

は上記のような接続詞変形を多く含んだ複雑な文の連なりを見せる．これは，

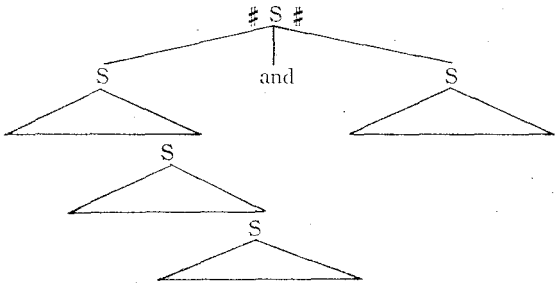



のような構造であり，同じ箇所の NEB の訳文，

$_{S}[_{s}$[There lived in the land of Uz a man of blamelessness and up-

right life] $_{S}$[(who was) named Job], $_{S}$[who feared God] and $_{S}$[(he) set his face against wrong doings]]

とその構造,




を比べてみたら，KJV に用いられた接続詞変形の多い文の生成過程の複雑さがよくわかる．NEB では，KJV の横に拡がった文結合体が，関係節変形を効果的に用いることによって整理されている．さらに，KJV, I, 18, 19:

$_{S}$[$_{S}$[Thy sons and thy daughters were eating and drinking wine in their eldest brother's house]]# $_{S}$[And $_{S}$[behold] $_{S}$[there came a great wind from the wilderness] and $_{S}$[(it) smote the four corners of the house], and $_{S}$[(it) fell upon the young men] and $_{S}$[they were dead]]

は # で区切られたふたつの情報を，ふたつの文で与えているが，この部分は NEB では,

$_{S}$[$_{S}$[Your sons and daughters were eating and drinking in their eldest brother's house], $_{S}$[when suddenly a whirlwind swept across from the desert] and $_{S}$[(it) struck the four corners of the house] and $_{S}$[it fell on the young people] and $_{S}$[(it) killed them]]

のごとく，接続詞変形を巧みに用いることと，代名詞の指示内容の整理による重文の複文化により，同一内容の情報がひとつの文で表現されている．

また，KJV, II, I:

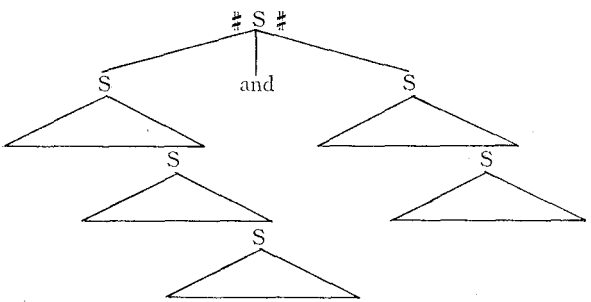
$_S$[$_s$[Again there was a day] $_s$[when the sons of God came] $_s$[to present themselves before the Lord] and $_s$[Satan came also among them] $_s$[to present himself before the Lord]]

は，NEB では，

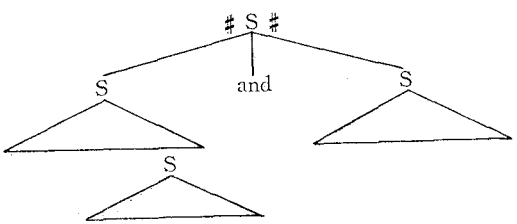
$_S$[$_s$[Once again the day came] $_s$[when the members of the court of heaven took their presence of the Lord] and $_s$[Satan was there among them]]

のように訳されている．つまり，KJV に見られる修辞的技巧の並列構文 (parallelism) を作り出すためのわざとらしい複雑な文結合は，NEB では避けられ，簡潔な構造となっている．これを図示すると，

KJV:




NEB:




という変化をしたことになる．

次に見られる興味深い事実は，KJV の複雑なはめ込みを重ねて作られた構造が，NEB では，等位接続詞 but を用いた重文を用いることによって，「はめ込み」の重用をさけ，意味伝達上の効果をあげていることである．

KJV, II, 3:

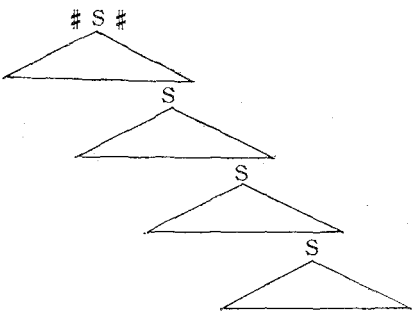
$_S$[$_s$[Still he holdeth fast his integrity], $_s$[although thou movedst me] $_s$[(to be) against him], $_s$[to destroy him without cause]]

は NEB では

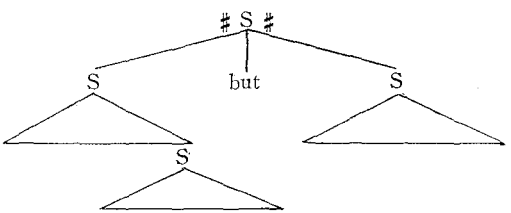
$_S$[$_s$[You incited me] $_s$[to ruin him without a cause], but $_s$[his integrity is still unshaken]]

となり，その構造は，

KJV:




NEB:




のように NEB ではは込みが簡潔になっている．

しかしながら，これとは逆に，NEB の方が KJV より複雑なはめ込み

をもつ場合もある.

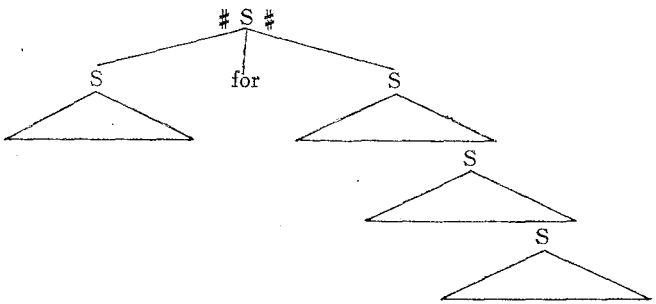
KJV, XXIV, 7:

$_S$[$_s$[My wrath is kindled against thee, and against thy two friends]: for $_s$[ye have not spoken of me the thing] $_s$[that is right] $_s$[as my servant Job hath]]

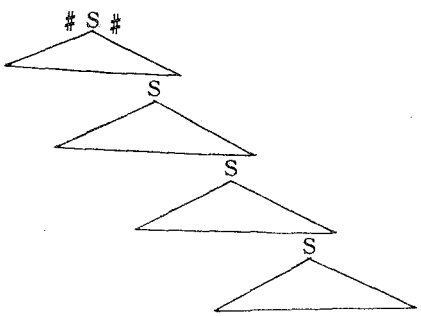
は NEB では,

$_S$[$_s$[I am angry with you and your two friends], $_s$[because you have not spoken] [as you ought about me], $_s$[as my servant Job has done]]

であり, KJV が,




のような, ひと組の等位節とそれにはめ込まれた数箇の文を従えた構造であるのに対して, NEB では,



のように，はめ込みのみで成る複文の構造を示す．この比較で考察されることは，NEB ではは め込みが複文化によって多様化していることである．

以上から，KJV の文結合は等位接続詞による重文に種々のはめ込み文が何重にも内包されることによって，独特の文体を作りあげている．それに対して，NEB では，重文を避け，はめ込みがあっても変化に富んだ変形を課すことによって，修辞的な文装飾よりも，まず第一に意味の明確化を計っているものと考えられる．

## 2. 疑似外位置変形[14]

いわゆる非人称の It で始まる特殊な構文で，これが KJV の時代の慣用法なのか，あるいは一種の変形によるものか筆者は結論を下せないが，ここでは，普通の外位置変形構文とは区別して，疑似外位置変形と名づけ，一種の合成変形の結果，得られたものと考える．

疑似外位置変形の結果生じた文は KJV にのみ見られるだけで，これらの箇所は NEB では，すべて別の構文で訳されている．

KJV, I, 5,

...it was so, when the days of their feasting were gone about, that Job sent and sanctified them...

NEB:

...when a round of feasts was finished, Job sent for his children and sanctified them...

の例では，KJV の疑似外位置変形構文は，複文になっている．また，

KJV, I, 5, :

...It may be that my sons have sinned...

NEB:

...he thought that they might somehow have sinned...

の例では，KJV の疑似外位置変形構文は，間接話法変形で訳されている．さらに，

KJV, XXIV, 7:

...it was so, that after the Lord had spoken these words unto Job...

NEB:

...when the Lord had finished speaking to Job...

の例では，KJV の疑似外位置変形構文は，NEB では，複文の一部として従属節に訳されている．

KJV の諸例に見られる疑似外位置変形構文は，現代英語の外位置変形構文とは異なった特殊なものであるが，これが原典の構文の直訳によるものか，当時の文語の慣用的表現法を借りたものかは不明である．

## 3. There 構文変形[15]

There 構文変形も KJV で好んで用いられるもので，いくつかの例がみつかる．

KJV, I, 2:

...there were born unto him seven sons...

は NEB では

NEB:

He had seven sons...

というように，他動詞構文で訳されているし，

KJV, I, 6:

...there was a day when the sons of God came to present themselves...

NEB:

The day came when the members of the court of heaven took their places...

では，KJV が Be 動詞構文を用いているのに対して，NEB では自動詞構文で訳されている．これと同様のものは次の各所にみられる．

KJV, I, 13:

...there was a day when his sons and daughters were eating and drinking wine...

NEB:

...when the day came that Job's sons and daughters were eating and drinking.

KJV, I, 14:

...there came a messenger unto Job...

NEB:

...a messenger came running to Job...

KJV, I, 16: (同17, 18 にもあり):

...there came also another...

NEB:

...another messenger arrived...

KJV, I, 19:

...there came a great wind from the wilderness...

NEB:

...suddenly a whirlwind swept across from the desert...

KJV, II, 1:

Again there was a day when...

NEB:

Once again the day came when...

KJV, XXIV, 11:

There came there unto him all his brethren and all his sisters...

NEB:

Then all Job's brothers and sisters... came...

のようなものがあり，これらすべての対照にみられるのは，NEB では，主語の明示と，主動詞の変更によって，意味の具体化が行なわれているという事実である．このことは，次の例ではより顕著である．

KJV, I, 8:

...there is none like him in the earth...

NEB:

...you will find no one like him on earth.

つまり，NEB では主語 you の明示と，他動詞構文を用いることによって，意味の具体化が行なわれている．

これまでの諸例では，KJV の There 構文が NEB では他の構文に改められているのを観察したが，この逆に，KJV の他の構文が NEB で There 構文に訳されている場合もみられる．

KJV, II, 4:

...all that a man hath will he give for his life.

NEB:

There is nothing the man will grudge to save himself.

KJV, XXIV, 15:

And in all the land were no women found so fair as the daughters of Job...

NEB:

There were no women in all the world so beautiful as Job's daughters...

上のふたつの例では，KJV の文中の倒置が NEB の There 構文の中の倒置より，はるかに複雑な形で行なわれていることに注意したい．

## 4. 倒 置 変 形[10]

英訳聖書にはしばしば修辞的技巧としての倒置変形がみられるが，KJV に倒置がある場合，NEB にもあることが多い．KJV になくて NEB にある場合には，倒置とそれに関連した表現による意味の明瞭化を期したものと観察できる．例えば

KJV, I, 10:
...thou hast blessed the work of his hands...
NEB:
...whatever he does you have blessed...

では，KJV の the work of his hands という抽象的表現が，whatever he does という具体的表現に変えられている．しかし，KJV にない語順の倒置が NEB では，目的語の先行という形で行なわれている．

倒置が KJV, NEB の両方にみられるのは，

KJV, I, 12:
...only upon himself put not forth thine hand.
NEB:
...only Job himself you must not touch.

の例であるが，この場合，KJV の倒置が，「前置詞句」と「動詞句」の倒置であるのに対して，NEB では，「目的語となった名詞句」と「主語＋動詞句」であり，これは，さきに引用した例の NEB の訳文の構文と同じものである．従って，同じ倒置があっても，構文の好みの違いは明らかである．

さらに，次の例でも構文の選び方の違いは観察できる．

KJV, I, 15:

Thus did Job continually.

NEB:

This he always did.

KJV の方は自動詞構文であるのに対して，NEB は他動詞構文をとっている．

より複雑な変形を含んだ倒置は，

KJV, II, 4:

...all that a man hath will he give for his life.

NEB:

There is nothing the man will grudge to save himself.

にみられる．KJV は関係節変形を従えた「目的語になる名詞句」と｛「主語」＋「動詞句（助動詞と本動詞）」｝の倒置がみられるが，NEB では関係節変形，関係詞消去変形がみられる[17]．

倒置が KJV にあり，NEB にはない場合は，

KJV, II, 9:

Then said his wife unto him...

NEB:

Then his wife said to him...

KJV, II, 10:

In all this did not Job sin with his lips.

NEB:

Throughout all this, Job did not utter one sinful word.

KJV, XXIV, 16:

After this lived Job a hundred and forty years.

があるが，この場合，KJV では，主語と動詞の倒置があり，これは単純

な強調のためのものである．このことから KJV では，修辞的倒置が好んで用いられていることが考えられる．

また，KJV の受動文の中における倒置が，NEB では別の構文で訳されている例として次のものがある．

KJV, XXIV, 15:

And in all the land were no women found so fair as the daughters of Job.

NEB:

There were no women in all the world so beautiful as Job's daughters.

この場合には，NEB では There 構文が用いられているので，すでに倒置はあるといえるのだが，KJV の強意のための述語部分分割の上に倒置があるのよりは平易なものであるといえよう．

## 5. 話　　法[18]

KJV では引用符を用いない直接話法のみがみられ，NEB では直接話法はすべて引用符を用いて表してあるのが普通である．

KJV, I, 7,:

And the Lord said unto Satan, whence comest thou?

NEB:

The Lord asked him where he had been.

の例では，KJV の「引用符に入らない直接話法（ここでは，仮に『疑似直接話法』とよぶ）」が NEB では「完全な形の間接話法」によって表わされている．

また，Ohmann のいう「間接表現法 (indirect discourse)[19]」の変形が KJV にみられる例として，

KJV, I, 8:

...the Lord said unto Satan, Hast thou considered my servant Job, that there is none like him in the earth...

NEB:

Then the Lord asked Satan, "Have you considered my servant Job? You will find no one like him on earth..."

というように，KJV の間接表現法は，NEB では，二つの直接表現法による文に分けられている．つまり，KJV の疑似直接話法とその中に間接表現法を含んだ二重構造が NEB では直接話法の中の二つの文というかたちで処理されている．

## 6. 関係節変形[20]

1. の文結合のところでも述べたが，関係節を用いたはめ込みがしばしば行なわれているのは，KJV, KEB に共通しているが，関係詞を用いた構文は KJV に多く，また，関係詞節が共に KJV, NEB の対応する構文に用いられている場合でも，用いられた関係詞の種類に違いがあることが多い．

that (KJV)→who (NEB)

KJV, I, 1:

...(and that man was) one that feared God.

NEB:

...a man, who feared God.

KJV, I, 8:

...one that feareth God.

NEB:

...a man, who fears God.

これら二例では，that→who の変更と共に，NEB では，接続関係詞変形がみられる．

that (KJV)→which (NEB)

KJV, II, 11:

...Job's three friends heard of all this evil that was come upon him.

NEB:

...Job's three friends...heard of all these calamities which had overtaken him.

KJV, XXIV, 11:

...and (they) comforted him over all the evil that the Lord had brought upon him.

NEB:

...and (they) comforted him for all the misfortunes which the Lord had brought on him.

関係詞の省略変形も，KJV ではみられないが，NEB ではよくみられる．

KJV, I, 1:

There was a man, whose name was Job.

NEB:

There lived a man...a man of...named Job.

この場合，KJV では関係詞の属格変形が用いられているが，NEB では，一旦関係節変形を経たあと，関係詞および名詞句と助動詞の省略変形が行なわれている．

KJV, II, 4,

...all that a man hath will he give for his life.

NEB:

There is nothing [that] the man will grudge to save himself.

上例では，KJV，NEB ともに関係節が用いられているが，先行詞も異なるし，文の発想法自体も異なる．NEB の関係詞省略変形に注意したい．

KJV, XXIV, 15,

And in all the land were no women found so fair as the daughters of Job...

NEB:

There were no women in all the world [who was] so beautiful as Job's daughters.

上例では，KJV は関係節を用いない比較構文で書かれているが，NEB では関係節を用い，さらに，これに省略変形を加えるという，さきに紹介したのと同様の変形過程を経ている．

次に，KJV の関係節変形による構文が，NEB では名詞句を用いて表現されているという一種の名詞化変形（nominalization）の例にふれておこう．

KJV, I, 10.

...all that he hath on every side

NEB:

...all his possessions...

さらに，

KJV, XXIV, 11:

Then came...all that had been of his acquaintance before...

NEB:

Then...his former acquaintance came...

の例では，KJV の関係節で表わされた内容が，former という形容詞一語で表わされている．もちろん，NEB の場合の形容詞の導入にも関係節変形が過程上作用しているわけだが，関係節を用いた回りくどい表現が巧

みに避けられていることは事実である.

これと同様に, KJV の関係節構文が NEB では副詞節構文になっているものに次のようなものがある.

KJV, XXIV, 7:
...ye have not spoken of me the thing that is right.
NEB:
...you have not spoken as you ought about me.

KJV, XXIV, 8:
...ye have not spoken of me the thing which is right.
NEB:
...you have not spoken as you ought about me.

## 7. 分詞構文と動名詞構文

分詞構文を用いて, 重文を複文化するのも NEB にしばしばみられる特徴である.

KJV, I, 5:
...and (he) rose up early in the morning...
NEB:
...rising early in the morning...sanctifying...

KJV, I, 20:
...and (he) said...
NEB:
...saying...

また, 動名詞構文を分詞構文によって言い換えたものとして,

KJV, I, 7:
From going to and fro in the earth and from walking up

and down in it.

NEB:

Ranging over the earth...from end to end...

がある.

さらに，動名詞を用いた言い換えは NEB に多く見られ,

KJV, XXIV. 7:

...after the Lord had spoken these words unto Job

NEB:

...when the Lord had finished speaking to Job

KJV, XXIV, 8:

...for him will I accept...

NEB:

I will surely show him favour by not being harsh with you

のごときものがある.

## 8. 自動詞構文と他動詞構文

自動詞を用いた構文は KJV に多く，NEB では，それらは他動詞構文に訳されている.

KJV, I, 3:

His substance was...and...and...

NEB:

He owned...and...and...

は典型的なもので，KJV の「名詞句（主語）＋Copula＋名詞句（補語）…」の構文が「名詞句（主語）＋他動詞＋名詞句（目的語）……」の構文で言い換えられている.

また,

KJV, I, 4:

...his sons went and (his sons) feasted in their houses, every one his day;

NEB:

...his sons used to foregather and... give a feast in his own house;

でも，KJV の「名詞句（主語）＋自動詞＋前置詞句」の構文が，NEB では，「名詞句（主語）＋他動詞＋名詞句（目的語）＋前置詞句」の構文に言い換えられている．

以上8項目でKJV と NEB の「ヨブ記」の散文の特徴を検討し，その文体を調べてみた．ここで明らかに観察できるいくつかの現象が，2種の英訳聖書全般にみられる事実かどうかは，更にもっと広い資料に基づいた研究をまたねばわからないが，少くとも，これだけでも KJV と，NEB の訳者の文体の特徴の一端がのぞけることに間違いはない．筆者はあえて 16 世紀と 20 世紀という通時的観点から，古語法と現代語法の比較というような史的研究の立場をとらないできた．よしんばここで紹介したいくつかの変形操作が，16世紀と現代の英語に共通した特徴であるとしても，筆者の扱った微量の資料からこれを言い切ることは余りにも大胆にすぎよう．しかし，少くとも，KJV と NEB の「ヨブ記」の散文を比較したとき，ここであげたいくつかの特徴が存在することは筆者の立場からは明白であるから，将来これら2つの英訳聖書全般にわたってこの主題を追求してゆきたいと思う．

## 注

1) Ohmannは言語理論的文体論の確立のために，いろんな言語理論を検討している．これは彼の "Prolegomena to the Analysis of Prose Style," *Style in Prose*

*Fiction: English Institute Essays*, 1958 ed. Harold C. Martin (Columbia University Press, New York, 1959) に明らかである. Ohmann はこののち "Generative Grammars and the Concept of Literary Style," *Word*, Vol. XX (December) 1964, pp. 423–439 (これは *Readings in Applied Transformational Grammar*. ed. Mark Lester (Holt, Rinehart and Winston, New York, 1970) pp. 117–137 に再録された. 尚, *Readings in Applied Trasformational Grammar* は以下 R. A. T. G. と略す.) や "Literature as Sentences," *College English*, Vol. XXVII, No. 4 (Jenteuary) 1966, (これも R. A. T. G. pp. 137–148 に再録) で文体分析のために変形理論が有効なことを論じている.

2) Mark Lester, "Introduction to Richard Ohmann's 'Generative Grammars and the Concept of Literary Style," R. A. T. G. pp. 116–119.

3) *Ibid*. p. 127.

4) *Ibid*. p. 130.

5) *Ibid*. pp. 128–136.

6) Robert D. King, *Historical Linguistics and Generative Grammar* (Prentice Hall, New Jersey, 1969), Chapter 6 "Syntax" の項や M. W. Bloomfield & Leonard Newmark, *A Linguistic Introduction to the History of English*, Chapter 6 参照. また Mark Lester, "Introduction to Richard Ohmann's 'Generative Grammars and the Concept of Literary Style'" R. A. T. G. pp. 118–119 にもこの旨の言及がある。

7) Ohmann は従来行なわれてきた文体研究の方法を 12 種あげている. それらは,

1. 通時的文体論
2. 共時的文体論
3. 印象主義的文体論
4. 音, 特に, リズムに基づいた文体論
5. ことばのあや (trope) の研究
6. 心象の研究
7. トーン, スタンスの研究
8. 文学的 (いわゆる新批評的) 文体論
9. 文中の語句の効果の研究
10. 省略の研究
11. 語句の研究
12. 文法的特徴の研究

であり, Ohmann によるとこれらはいずれもカテゴリーの粗雑さと, 方法の曲り

くどさで何も例証できないばかりか，文法的事項を自己の独断によって分類した自説の列挙にすぎず，部分的には成功した例はあっても，全体を包括するような視野に立つ分析はなかった．これは，基礎になる言語理論的，意味論的な理論づけが背後にないからであり，文体というのは，その言語の使用上の特徴であり，その使用者(著者)の発想法の発現であり，それらの体系が明らかにされないままではどんな研究も成立し得ないという．Ohmann, "Generative Grammars and the Concept of Literary Style," R. A. T. G. p. 122.

8) 例えば，*Literary Style of the Old Bible and the New*. ed. D. G. Vehl (The Bobbs-Merrill, New York, 1970) の中のいくつかの論文や，James Moses Grainger, "Studies in the Syntax of the King James Version," *Studies in Philology*, Vol. III, (The University Press, Chapel Hill, 1907) pp. 1–60 参照.

9) James Moses Grainger, op. cit. pp. 5–8.

10) *The New English Bible* (Oxford, Cambridge, 1970) p. xviii.

11) Richard Ohmann, "Generative Grammar and the Concept of Literary Style," R. A. T. G. p. 125.

12) 関係節変形については，Robert B. Lees, *The Grammar of English Nominalizations*, (Publication XII of the Indiana University Research Center in Anthropylogy, Folklore and Linguistics, Bloomington, 1964), の 変形規則 GT 19 と，T 5, T 6, T 58 を用いたもの.

13) 接続詞変形については，Noam Chomsky, *Syntactic Structures*, Second Printing (Mouton & Co. 's-Gravenhague, 1962) p. 36 と p. 113, 及び Lila R. Gleitman, "Coordinating Conjunctions in English," *Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar*, eds. David A. Reibel et al. (Prentice Hall, New Jersey, 1969) 参照.

14) 外位置変形についてのくわしい研究は，Peter S. Rosenbaum, "The Grammar of English Predicate Complement Constructions," *Ph. D Dissertation*, MIT, 1965 (のちに *The Grammar of English Predicate Complement Constructions* (MIT Press, Cambridge, Massachusetts, 1967) として出版) や D. Terence Langendoen, "The Syntax of the English Expletive 'It'," *Report of the 17 th Annual Round Table Meeting on Linguistics and Language Studies*, ed. Francis P. Dineen, Georgetown University Press, Washington D. C., 1966, さらに，James Moses Grainger, *op. cit.* pp. 10–13 など参照．Grainger はこれについて，"The Impersonal Construction" の項でふれている.

15) There 構文変形については，Barbara C. Hall, "Subject and Object," *Ph. D. Dissertation*, MIT, 1965, pp. 20–25 や Roderick A. Jacobs & Peter S. Rosen-

baum, *English Transformational Grammar*, Blaisdell Publishing Co., Massachusetts, 1968) p. 85 に簡単にふれられている.

16) 倒置変形は表層構造が完成した段階で語句の置き換えが行なわれるものと考えられる. その場合, 「強意」という信号によって語句のもとの位置が入れ換わるものと考えられる. Bloomfield & Newmark, *op. cit.* pp. 265–266.

17) 関係節変形, 関係詞消去変形については注 12 の Lees の論文や Jacobs & Rosenbaum, *op. cit.* 参照.

18) Ohmann, "Generative Grammars and the Concept of Literary Style," R. A. T. G. p. 132.